

## 卷頭言

水落健治

教父にかかわる一冊の翻訳のことを書くことをお許しいただきたい。

一九八八年一月、私はA・ラウス『キリスト教神秘思想の源流——プラトンからディオニュシオスマで』（教文館）を上梓した。翻訳の話は、その三年ほど前、東洋大学の泉治典先生からいただいたものだった。当時私は、大学院を修了してあまり時間も経っておらず翻訳の経験もなかったが、渡された原本を見るとそれほど大部の著作でもなく、英語もそれほどむずかしくもなさそうだったので、軽い気持ちでお引き受けしたのだが、いざ仕事を始めてみると、最初の一頁も訳さないうちに、引き受けたことを後悔した。

まず、そこに書かれていることがらが、当時の私にはほとんど未知のことからだった。話は、プラトンの「洞窟の比喩」(『国家』第七卷)に始まり、アレクサンドリアのフィロン、プロティノス、オリゲネス、アタナシオス、ニュッサのグレゴリオス、ポントスのエウアグリオスといったギリシア教父の思想が、彼らのもつ神秘思想の側面を中心に述べられ、ラテン教父であるアウグスティヌスについて論じられたのち、ディオニュシオス・アレオパギテースの思想の概要が論じられ、彼らの思想の近世への影響の実例として十字架のヨハネの思想が紹介されるのだが、ほとんどアウグスティヌスしか読んだことのなかった私には、ここで論じられる教父たちの話は全く馴染みのないものであった。プラトンやプロティノスのことは哲学の授業で知っていたし、フィロンやオリゲネス、アタナシオスについても教義史的な知識はもっていたが、プラトン派の哲学が教父の思想にどのように繋がるのか、などという問題は、当時の私には思いもつかないことからであった。今でこそ、ギリシア教父の研究も日本で盛んになって来たが、当時を振り返ってみると、オリゲネスやニュッサのグレゴリオスなどの著作の邦訳などは皆無であり、現在ギリシア語名で呼ばれるディオニュシオス・アレオパギテースですら、トマス『神学大全』に現れる「ディオニュシウス・アレオパギタ」Dionysius Areopagitaという呼称で呼ばれるのが常であったのだから、当時の私の戸惑いも、ある意味では当然のことだったのかもしれない。

第二に私を悩ませたのは、この書の中に頻繁に現れる教父の著作からの引用だった。引用は「定番

の英訳」によって行われており、訳文も読みやすかったのだが、重訳を避けるためにギリシア語本文を見ようとすると、書名は書かれているものの、出典箇所が全く書かれていないのである。「重訳は避ける」というのが当初からの出版社との約束であったので、私は引用箇所をひとつひとつ探し出して翻訳していったのだか、これがまた骨のおれる仕事だった。引用文の中に英語で現れるキーワードのギリシア語を推定して、その語の現れるテキストを片っ端からつぶして行くのだが、ニュッサのグレゴリオスの『雅歌購解』のような大きな著作になると、当該箇所を捜し出すのに何日もかかってしまった。加えて、エヴァアグリオスの著作や、『マカリオスの説教』などに至っては、ミーニュ教父全集の当該巻を確認するのも一仕事だった。

だがその一方、翻訳を進めて行くにしたがい、そこに書かれている内容が不思議な仕方です魅了していった。プラトンの語る真の世界への憧れ（エロース）が、教父に至って超越者なる神への無限の上昇（エペクタシス）となつてゆく、という著者の主張が、私の中で——豊富な引用によつて——追体験されているということが、翻訳を進めてゆく内に実感されて来た。ニュッサのグレゴリオスの『雅歌購解』の引用を訳するときには、Liddel-Scott のギリシア語の辞書と格闘しながら涙が出て仕方がなかったのを今でも覚えている。翻訳が終わったとき、翻訳原稿は、出版社からいただいた二〇〇字詰原稿用紙で四〇センチの高さになった。当時はワープロなどもいまだなく、原稿はすべて手書きだったため、私の右手は腱鞘炎になった。だが、肉体の痛みとは裏腹に、私の精神

は、新しい世界を身をもって知った喜びで充実し高揚していたように思う。

翻訳が出て三年後の一九九一年の夏、私はオックスフォード大学で行われた第一二回国際教父学会に出席した。自分の発表を終えて見ると、会場の一隅に、「ここ四年間に出版された教父関係の書物」のコーナーがあり、私の翻訳も陳列されていた。欧米人には見慣れない東洋の言語への翻訳であることが、参加者たちにとって特に珍しかったらしく、私が翻訳者だと分かると、多くの研究者が私の所に来て、「よい書物を翻訳した」と言ってくれた。著者ラウスの分科会に出て翻訳のことを話すと、あるイギリスの研究者が「ぜひ私の家に来て泊ってほしい」と申し出てくれた。とても嬉しかった。

今、この翻訳が出版されて二〇年が経った。振り返ってみると、この間に日本の教父研究も格段の進歩を遂げたように思う。だが折に触れて「ラウスの本が教父研究の入門書として役に立った」とか「この翻訳には類書がない」などの言葉を聞くと、「私の翻訳も少しは日本の教父研究の進歩に役立つのかもしいない」と思う。そして、出版社である教文館が、今なおこの翻訳を絶版にしないでいくれることを何よりもありがたく思っている。